

発行所(郵便番号100)  
 東京都千代田区丸の内2-4-1  
 丸の内ビルディング781号室  
 社団法人スウェーデン社会研究所  
 Tel (212) 4007・1447  
 編集責任者 高須裕三  
 印刷所 関東図書株式会社  
 定価150円(年間購読料式千円)  
 1976年8月25日発行  
 第8巻 第8号  
 (毎月1回25日発行)  
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

# スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 8 No. 8

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning  
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)  
 Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

## ツェンベリー来日200年記念特集

(I)

### ツェンベリー来日200年記念行事 — 準備委員会余録 —

Memoirs from the Preparatory Committee of Thunberg's  
 Celebration in Japan

準備委員長・日本植物学会会長 林 孝 三  
 Chairman of the Committee, Dr. Kozo Hayashi



スウェーデンの植物学者C. P. ツェンベリーが日本の植物相を初めて西洋の学界に紹介してから今年でちょうど200年になります。これを記念して植物学を中心とした学術的な行事がスウェーデン大使館と日本植物学会の共催で、去る5月に東京・京都・長崎で行われました。その際、スウェーデン社会研究所が日瑞間の「かけ橋」となって熱心に協力されました。

この行事の主人公であるツェンベリーの人物や学績また文化使節としての貢献などは、すでに高須裕三教授が本誌(第8巻1号)に詳しく紹介され、また当時のテレビや新聞にもしばしば報道されましたし、記念行事の経過については本号に木

村陽二郎博士の詳細な記事もありますので、私はこれらと重複しない、いわば準備の裏ばなしを書かせて頂きたいと思います。

× ×

事のおこりは、昭和50年10月1日の午前、スウェーデン大使館のPer Fritzson 報道官がスウェーデン社会研究所の河野道夫氏を伴って早大の大隈会館へ来られ、植物学会から私と幹事長の大島康行早大教授が出席、ほかにこの会合の橋渡しをされた早大の桜井英博教授も同席されました。フリッツソン氏から、日瑞文化交流の第一陣としてツェンベリー記念行事を明春5月18日(ツェンベリー江戸城出府の日)前後に開催したいので、日本植物学会で協力してほしいということでありました。ツェンベリーは日本の植物分類学の父でもあり、わが国でこの学者の記念行事は前例もあること故、植物学会としては前向きに検討すべきで

#### 目 次

ツェンベリー来日年記念特集(1)	
記念行事準備委員会余録……………林 孝三…	1
ツェンベリー記念事業始末記…木村陽二郎…	4
京都の「森林生態シンポジウム」…	
……………佐藤大七郎…	6
ツェンベリーをたずねて……………高橋 文…	9
武田事務官の栄転を祝して……………	11

あるが、これを成功させるには単に分類学者だけでなく、植物生態学とくに森林生態学者にも協力を求めて、日瑞両国の植物相に共通する基礎的な問題を語り合う学術小集会を企画するのが現代におけるツェンペリーの再発見につながるのではないかという意味のことを、大島教授とともにフリッツソン氏に伝え、即座に合意が得られました。早速、私たちはこの事を午後の植物学会常任評議員会に報告して全員の賛同が得られ、植物学会の名において話を進めることになりました。そこで、学会として分類学の原寛、木村陽二郎、生態学の宝月欣二、林学の佐藤大七郎の諸氏に事の次第を連絡して、日瑞共催による記念行事の基本構想やスピーカーの人選などを協議し、その都度大使館側とも連絡しながら原案を煮詰めた上、大使館で日瑞間の公式連絡会を開いたのが11月14日でありました。このとき、大使館側からスウェーデン学者の意見なども採り入れた試案が示され、日本側の考えと突きあわせて、ご承知のような行事計画の大綱が出来上がったのであります。

これで植物学を中心とする記念行事の内容がほぼ固まったわけでありましたが、これを実施に移すには、さらに広範囲の社会的支持を求めなければなりません。このための第2回連絡会（11月25日）ではスウェーデン社会研究所から高須裕三教授が出席され、むしろ積極的に協力を約束されたので、今後の作業にとって明るい見透しが得られたのであります。これまではごく少数の方々だけで内外学者との連絡に当り、一切の事務は大島教授に依存してきましたが、12月20日に開かれた次の打合会で日本側の準備委員会を発足させ、取りあえず14名の委員を委嘱して事務を分掌することにしました。委員長には私が指名され、大島氏には事務担当の幹事を、高須氏には財務担当の幹事をお願いしました。なお、展示会のことはこれまで通り原寛博士に引きうけて頂きました。これで漸やく準備の態勢は整ったものの、開催までは余すところ僅か5ヶ月でありました。

東京での開会式・公開講演会、植物分類学シンポジウム、京都での森林生態学シンポジウム、長崎での公開講演会・閉会式、このほか各地での植樹祭、エキスカッション、リセプションなど、さらに会場の移動に伴う切符やホテルの予約まで、気が遠くなるほど多くの仕事が待ち構えていました。そこで、京都・長崎からも現地委員の推薦を

願って2月20日の準備委員会でこれを追認し、総勢20人が一丸となって記念行事の実質的な詰めに入ったのであります。この際、関係委員のご協力はもとより、陣頭に立った大島幹事の絶大な労苦と活躍には全く頭のさがる思いでありました。

× ×

一方、これと併行して高須幹事によって募金活動も着々と進められました。これには広く社会各層の理解と支持が必要であり、そのためには趣意書の作成が大きな役割をもつこととなります。そこで、人文サイドのセンスも織り込んだ趣意書の作案を高須幹事にお願ひ、これに大島幹事からの行事实施計画、所要経費の収支などを加えて印刷物にしたのが4月上旬、さっそくこれを持って高須幹事とともに各方面を歴訪したのであります。幸い、大方の御理解と御援助を得ることができ、5月の行事を予定どおりに実行することができました。これには各委員の個々の努力のほか、スウェーデン社会研究所西村所長以下全員の御協力が大きな支えになったのであります。

× ×

今回の記念行事は植物学を中心にした企画ではありますが、それは飽くまで将来にわたる日瑞文化交流の一環をなすもので、大きくいえば国としての行事なのであります。したがって、準備委員会としては、企画の当初から、文部省学術国際局はじめその他の公的機関とも十分に連絡しながら事を進めて参りました。詳しいことは省略しますが、結果的には文部省、日本学術会議、日本学術振興会からの後援をいただき、さらに日本学士院、東京大学、同総合研究資料館、同理学部附属植物園、国立科学博物館、京都大学、同農学部附属演習林上加茂試験地、長崎大学、長崎市および市立博物館、長崎県立図書館、熊本市立博物館など広く各界のご支援を頂きました。なお、東京朝日講堂での開会式・公開講演会、長崎県立図書館での講演会・閉会式には予想を遙かに上回る多数の方がたが出席されましたが、それは朝日新聞社、長崎新聞社をはじめ各報道機関のご協力によるものであります。また、5月19日夕刻、日本学士院のホールで文部省学術国際局と日本植物学会の主催で催された日本側のリセプションはスウェーデン国に対する最大の敬意と親善の贈物になりました。準備委員会として本誌をかりて篤く御礼を申し上げます。

以上のように、この記念行事は江湖の支持と協力のもとで予定のスケジュールを完全に消化し、一行は雲仙—熊本—阿蘇の順路で新緑の九州をバスで横断、大分空港から東京へ着いたのが5月25日の夕刻でありました。これで行事そのものは無事に終わりましたが、その総まとめとしてのプロシーディングズの刊行が残されており、準備委員会は目下その仕事に追われています。年内には正式の報告書としてお目にかけていると思っています。

× ×

最後に、スウェーデン側のことについて少し触れさせていただきます。初めにも記したように、大使館側ではフリッツソン報道官が窓口となって常に日本側の意を汲みながら来日する植物学者の人选、シンポジウムのテーマの選定、行事の規模・内容などを具体的に示して準備の促進を図られたのであります。同氏の簡明卒直しかも友情溢れる対応振りはさすが練達した報道官という印象で、日本側の作業の進捗にも大きな力となりました。

5月16日の午前、スウェーデン学者の一行を羽田に迎え、大使ウーデヴァール閣下以下大使館の方々とともに私たち準備委員も、一行の無事到着を喜び会いました。そして翌日から前後九日間の記念行事に入ったわけではありますが、その間大使ご夫妻も学者一行と文字通り行動を共にされ、東京を離れてからは乗物も宿舎も全部一緒に、終始気さくな旅を楽しみました。5月20日、舞台を京都にうつし、京大の赤井竜夫助教授の献身的な努力で作られたスケジュールに従って、北村四郎博士の案内で修学院離宮を見学、そのあと京大演習林上加茂試験地で記念植樹をしました。翌21日は京都会馆での生態学シンポジウムのあとで、四手井綱英博士の先導で北山杉を見学しましたが、折あしく車軸を流すほどの強い雨で白雲の湧立つ美しい杉木立を遠くから望むだけでした。この時、大使夫妻は、傘を片手に、この得がたい景観に見入っておられ、私が脇から「これこそ天與のチャンス—まさに日本画の心であります」などと口を添えたりしました。

5月22日は長崎へ飛びました。そこでは準備委員の一人である市立博物館長越中哲也氏の用意されたスケジュールに従って、ツェンペリーゆかりの地長崎の市内見学、翌23日は記念植樹ののち、行事最後の講演会を盛会裏に終了し、諸谷長崎市長主催のリセプションに臨み、長崎大学の外山三

郎名誉教授、伊藤秀三教授や長老岡田喜一博士などとも親しくお話しして共に行事の成功を喜びました。スウェーデン大使ご夫妻や報道官夫妻、タム教授夫妻、ヘッドベリー教授、ノルデンスタム博士、リンデル博士なども、長途の疲れもみせず、長崎の方々ともども交歓の数刻を過ぎました。

翌24日は、マイクロバスで雲仙を経て熊本に入り、熊本市立博物館長上村健一氏と同副館長西岡鉄夫氏の案内で水前寺公園へ直行しました。折から降りしきる雨で、やむなく池畔の茶寮（古今伝授の間）で茶菓の接待をうけながら、熊本城主細川侯の造営になる池水の美を雨越しに観賞しました。このとき大使は床の間の一輻を指さして、これは何かと私にたずねられた。墨痕あざやかに「誰謂水無心」（註）とあります。私は突差のことでその意を解しかねましたが、やむなく「水無心」の部分を取りあげて私なりに水の心についてお話ししました。水は自在に方円の器にしたがうが、その心（本性）は常に汚れなき水である。このたびの記念行事を通してみると、大使は京にあっては京の、長崎では長崎の、心と風物にとけ込んで親善の誠を尽くされましたが、これはまさに水の心でありましよう。帰る途すがら、大使は雨の中でふと立ち止って、同じ意味のことは英国のある書物でも読んだことがあると話されました。

「註」後日、熊本大学の石倉成行教授を通じて水前寺公園にたずねたところ、書は細川護貞侯の筆で、句は菅原道真公のものという。「誰か謂ハンヤホニ心無シト」と訓ずる。

その晩、宿舎の熊本キャッスルホテルで同宿者一同は大使ご夫妻の晩饗会に招かれ、互いに行事の成功を喜び、心おきなく歓談して交友を深めました。この席で森林生態学の長老であるタム教授から、「今回の行事が分類学と生態学の接点を索めた前例のない企画であることを知って、自分は何を措いても日本へ出かけなければならないと思った。成功を心から喜ぶ」という挨拶がありました。準備委員会にとっても、また日本植物学会としても、この言葉によって大いに面目をほどこしたわけでありました。

私たちは、ツェンペリーの来日200年を記念した今回の行事が、単に植物学だけに終ることなく、もっと広く日瑞両国の親交と文化の交流のための礎石として役立つことを願って止みません。

（1976年8月、進化生物学研究所にて）

# ツェンベリー記念事業始末記

A Report on the Bicentenary Celebration of Thunberg's  
Visit to Japan

中央大学教授 木村 陽二郎  
Prof. Yojiro Kimura



近代自然誌を樹立したリンネ、その最大の弟子、ツェンベリーが鎖国日本を訪れ江戸に出たのは今からちょうど200年前のことである。これを記念してツェンベリー来日200年記念事業を行うことが在日スウェーデン大使館できめられ、日本植物学会に共催の申し込みがあったのは昨年秋のことであった。準備の期間は長くはなかったが、大使館、日本植物学会、スウェーデン社会研究所の諸氏によって準備委員会が発足し、計画を立てたが、幸い文部省、学術会議、学術振興会をはじめ多くの団体や、多くの方々からの後援、賛同を得てほぼその目的を達し、今ではシンポジウムの報告の印刷と一般報告が残っているという状態である。記念事業の趣旨やそのプログラムについては月刊「植物と自然」の5月号をみられたい。

スウェーデン大使ウーデヴァル閣下 (Bengt Odevall) や報道官フリッツソン氏 (Per Fritzson)、その他スウェーデン側の人々と共に私たち準備委員は5月16日(日)にスウェーデンからの参加学者たちを無事羽田に迎えたのである。ヘッドベリー教授(Olof Hedberg)、タム教授(Carl Olof Tamm)とその夫人、ノルデンスタム博士(Bertil Nordenstam)、若いリンデル助教授(Sune Linder)が来日された。

ツェンベリーが日本の長崎に来るまでには途中で喜望峰の植物調査に3年間を費やしたからとはいえ、スウェーデンを出てから5年もたっていた。それが昨日スウェーデンを発った人達が今ここ日本に来ているということはやはり驚きで、そこには200年の流れを感じた。

5月17日の早朝のNHKテレビ、スタジオ102には早々にヘッドベリー教授と原寛教授とがアナウンサーの質問に答えて、教授持参のツェンベリー愛用の顕微鏡を前に年記念行事を紹介し、ツェンベリーの功績を讃えた。これより先、スウェーデン社会研究所の高須裕三教授と共に、準備委員会の幹事をされた、日本植物学会幹事長大島康行教授がNHKテレビの教育放送でアナウンサーと30分間ツェンベリーの仕事を紹介されていた。

17日の午後6時から9時まで朝日新聞社後援で、社の講堂で今回の一連の行事の開会式と記念講演会が公開された。鎖国日本を訪れた最もすぐれた学者であるツェンベリーも植物学者を除くと一般にはなじみが薄い。はたして700人収容の講堂でよいだろうかと思委員たちは心配していたが7割の入ではあった。

記念行事については4月28日、文部省で新聞記者会見を行い、記者はそれによって記事を書き(朝日5月8日; Mainichi Daily News 5月17日; など)、また委員側でも記事を書いた(木村、朝日5月14日; 外山、長崎新聞5月17日、高須、毎日5月20日)。行事の次第は生物学関係では「生物科学ニュース」No.52、53、1976-3、4や科学史関係では「科学史通信」No.208、1976-3に発表、木村は行事次第を含めてツェンベリー紹介記事を雑誌「自然」(31巻-6)に書いた。案内状は大使館や準備委員会から各方面に広く配られた。

式は大島教授司会のもとスウェーデンと日本両国旗を背景に大使の挨拶にはじまり、ノルデンスタム教授がツェンベリーの生いたち、アフリカ植物の研究、日本への渡来について話し、木村が日

本への困難な旅、植物採集の苦心、日本植物学への功績について述べた。ついで今回スウェーデンから来たリンネの映画があった。次に「緑の保全巨視的な視点から」と題して吉良竜夫教授とヘッドベリー教授の講演があって、日本植物学会会長孝三博士の閉会の辞で終わった。

18日は朝から快晴で、東京大学附属植物園に一同集合、園長下郡山正巳教授の案内で園内見学、特に精子発見のイチョウはスウェーデンの学者の関心を引いた。大使と日本植物学会長のくわ入れに始まり、クロマツ *Pinus Thunbergii* を記念樹として植樹式のあと本郷の東大構内の総合研究資料館一階の展示室に行き、館長江上信雄教授、展示担当の原寛博士に迎えられた。そこに今回持参のウブサラ大学やストックホルムの博物館のツェンベリー採集の植物標本や彼の愛用の顕微鏡、フロラ・ヤポニカの原稿、日本からの持ち帰りの器具や2枚の浮世絵版画、関連の内外書籍の展示があった。200年祭を記念して、井上書店の複製した『フロラ・ヤポニカ』と伊藤圭介著『泰西本草名疏』も出品された。

来観者参考のため、原博士編集の「特別展示ツェンベリー来日200年記念」の8頁のパンフレットが提供されていた(雑誌自然8月号参照)。ついで東京大学総長の茶果の招待があり午前を終えた。午後スウェーデンの学者たちは宮城に向った。

200年前の今日、5月18日にはツェンベリーはキャプテン、すなわちオランダ商館長フェイト、秘書コオレルと共に江戸城で將軍家治に挨拶したのであったが、今日スウェーデンの学者たちは昔の江戸城、現在の皇居に入ったのであった。同夜は大使館でレセプションがあった。

5月19日は午前10時から午後4時まで上野の国立科学博物館で原寛、ヘッドベリー両博士の司会で、植物分類学シンポジウムがあった。スウェーデンの学者は喜望峰の植物誌をまとめたツェンベリーをついで、アフリカの植物を研究、ノルデンスタム博士はその歴史にもふれ、ヘッドベリー博士はアフリカの高山帯要素の起源と分化について述べた。博物館食堂で気ままに食事をした後、日本側は最近もっとも海外植物調査として充実したヒマラヤの植物研究を、金井弘夫博士と原寛博士とが話した。

その後、上野国立博物館の庭園を見せてもらう。夜は新しく建て直された日本学士院で、文部省学

術国際局長木田宏氏と日本植物学会長との主催で日瑞両国参加者の歓迎レセプションがあった。

20日はスウェーデンの学者たちは大使をはじめ日本の学者とともに京都に向い、昼食後北村四郎博士の案内で、修学院庭園を見学、さらに京都大学農学部演習林上賀茂試験地を訪れ、クロマツとアラカシの記念植樹式を行った。宿はパレスサイドにとった。

21日は午前10時から午後3時にわたり京都会館でタム博士、佐藤大七郎博士の司会のもと森林生態シンポジウムがあり、タム、リンデル両博士をはじめ小川房人(大阪市大)、根岸賢一郎(東大)塘隆男(農林省林業試験場)各博士が話題を提供した。自然の愛好と共に緑の保全が叫ばれている現在、その基本的な森林生態学の地道な研究は強張されすぎることはない。終わって北山杉の見学などがあった。

200年前のツェンベリーは長崎の出島を3月4日出発し、小倉から下関、それから兵庫までは船に乗り、他は駕籠で旅を続け、4月27日江戸に着いた。そして5月25日江戸を発って6月25日に出島に帰った。今回の一行は東京から京都までは新幹線の特急、大阪空港から長崎の大村空港まで飛行機で一飛びである。

筆者は前日東京から長崎に来て、挨拶や打合せにすぎず、22日長崎大学の伊藤秀三教授、長崎での行事の世話役となって下さった長崎博物館長越中哲也氏と共に、一行を大村空港に迎え、宿のグランドホテルに案内、昼食後、日本62聖人殉教地資料館、平和公園内の国際文化会館の原爆資料展示室、グラバー園などを見学した。

23日には午前中、ホテルから近い出島内の市立長崎博物館にゆき展示をみた。この度の長崎の行事に尽力された長崎大学名誉教授外山三郎氏に迎えられた。岡田喜一博士や『長崎のオランダ医』の著者中西啓博士にもお目にかかった。隣家の朝永氏の茶室で一行に抹茶の接待があった。長崎市長がせわしい時間を都合して来られて、出島の庭園のなかのシーボルトがケンペル、ツェンベリー両氏を顕えた碑の前に斑入りの葉の美しいアオキを植え、雨ではあったが、大使、諸谷義武長崎市長出席のもと植樹祭が行われた。

昼食にホテルに戻った後、午後2時から県立図書館講堂で越中氏の司会のもと、記念式典と講演

会があり、日本植物学会長、スウェーデン大使、長崎市長諸谷義武氏の祝辞の後、講演がノルデンスタム、外山三郎の両氏と木村で行われた。外山三郎氏は話の中で図書館前にあるツェンペリーの記念碑にふれた。

大正14年10月には「ツェンペルク先生渡来百五十年記念会」が武藤長蔵、田中長三郎両博士たちにより、長崎で行われ、記念講演会、展示会があり、記念論文集が出版された、また昭和8年(1933)11月には東京科学博物館で記念展示会が伊藤圭介の孫にあたる伊藤篤太郎博士所有の資料を中心にあつたが、1943年はツェンペリー生誕200年にあたる。しかしやつと戦後になって、10年の後ではあるが、記念行事を行い、1953年東京で1月4日から26日まで展示会、同13日に講演会、長崎で展示会が長崎市立博物館で11月1日から5日まで、講演会は長崎カトリック・センターで開かれた。また「ツェンペリー研究資料」が同年発行された。この記念のためツェンペリー記念碑が図書館の前、諏訪公園の一隅に建設されることになり、これを担当された木村有香博士の徹底した精密な注文を受けて、越中氏と共に奔走された外山氏の今回の講演会の思い出話は印象的であった。長崎の植物方言がツェンペリーの日本植物誌にかかれていた話も興味深かった。講演の後は「スウェーデンの自然」の映画があつた。

その後、同図書館内でのレセプションは、雨に洗われた緑の映える山々にかこまれた港の美しい景色を賞でつつ心のこもった日本料理や洋食、菓子のもてなしを受けた。大きな桃まんじゅうは大

使に大変気に入られた。

翌24日は朝ホテルを出て、雲仙岳の地獄を見学、ちょうどシロドウダンの花が美しく盛りだった。九州ホテルの心のこもった日本食を終えてバスの旅をつづけ須川につき、フェリーで対岸三角に着くと熊本博物館長上村健一氏、副館長の西岡鉄夫氏に迎えられ、雨に煙る水前寺の絶景を見、緑の多い熊本城を見学、そこでは熊本五花の苗が育っていた。窓から城の見える熊本キャッスルホテルに落ちつき、一同夕食を共にし、交友を深めた。

翌25日は阿蘇山の見学である。ちょうどミヤマキリシマが満開で美しかったが、山頂附近は噴火の灰をかぶって枯れた株も多かった。バスの停まる所常にもスウェーデンの学者たちは植物の観察に忙がしく、ヘッドベリー教授はさすがツェンペリーの後つぎのウプサラ大学植物学教授だけあつて昼食のときも飯ぬきで歩いておられた。これにはバスの運転士も感歎久しかったが、箱根山で駕籠をおりて、駕籠かきの負担をかるくし暇を惜しんで植物を採集したツェンペリーを思い出し、当時の駕籠かきの意見がきけたらと思った。

バスは別府に出て、大分空港に出て、ここから東京へと飛んだ。なおタム夫妻は熊本から脇孝介氏案内で九州の林業視察の旅に切りかえられた。

私たちは植物学や森林生態学の面での両国の交流と共にツェンペリーが果したように広く両国の文化交流を今後も希むものである。

(本稿は、木村先生並びにニュー・サイエンス社の諒承をえて月刊植物と自然7月号より転載したものである)

## 京都の「森林生態シンポジウム」

Forest Ecology Symposium in Kyoto

東京大学教授 佐藤 大七郎

Prof. Taisitiroo Satoo

5月20日、東京の行事をすべて終って京都にむかう。「ひかり」の普通車。日本の研究者にとって普通車は「普通車」であるが、大使館の方々にとっては初体験であろう。新幹線の普通車にのつた最初の外国の大使としての榮譽をオデヴァル大使は獲得されたにちがいないと思うので、特に記録にとどめておく。計画の中で、この点と大使の

つかわれるような第一級のホテルの準備はできないことは、一国の大使という御身分に対して気がかりで、くれぐれも念をおしたことだった。

さいわい富士山も顔を見せてくれ、車窓から見える茶畑や養鰻池などもスウェーデンの学者がたには珍しいものであつた。ひるまえ京都着、中食後京大名譽教授の北村さんの御案内で修学院庭園



写真 上賀茂試験地での植樹式の碑をかこむ  
佐藤博士とFritzson氏。

の見学。ちょうど、松のみどりをつむ植木屋さんの  
の仕事中で、それも異国の植物学者の興味をひく  
もののひとつである。暖国の民である我々にとつ  
て暑すぎる午後であったが、寒国の民であるスウ  
エーデンの学者たちはかえってこの強い目ざしを  
喜んでくれた。

ついで、京大農学部演習林の上賀茂試験地を訪  
れた。此処は世界のマツ類をよく集めていること  
で有名であり、またかつて竹の研究がさかに行  
われた所である。マツ類の見本林や竹の標本を見  
学したあと、運よく、モウソウチクの竹藪をそのま  
ま掘って地下茎をあらわした所を見学することが  
できた。写真をとるために最近に土をとりのぞい  
たのを我々のために埋めもどさないでおいてくれ  
たのだそうで、地下茎のはしりかたや竹や筍ので  
かたがよくわかる。此処でツェンペリー来日200年  
を記念する植樹が記念行事の主催者を代表して、  
オデヴァル大使と林植物学会長によって行なわれ  
た。記念樹はクロマツとアラカシである。クロマ  
ツは東京の小石川植物園とスウェーデン大使館で  
の記念植樹にも用いられた。学名の *Pinus Thun-*  
*bergii Parl.* はツェンペリーを記念してつけ  
られたもので、いわばツェンペリー松である。アラ  
カシはツェンペリーによって最初に植物分類学的  
に記載されたもので、*Quercus glauca Thun-*  
*berg* という学名が最近まで使われていた。学名  
の最後の *Thunberg* というのはツェンペリーに

よって学名がつけられたということである。とも  
にツェンペリーを記念するにふさわしい木である。

明けて21日はかなり強い雨である。シンポジウ  
ムの会場である京都会館にバスでむかう。この度  
の記念行事のふたつのシンポジウムのひとつであ  
る「森林生態シンポジウム」である。このシンポ  
ジウムは、記念行事の計画のはじめのころ、スウ  
エーデン側から提案され、この度来られたタム、  
リンデル両氏等の名前をあげられた。日本側で  
は、これにあわせて準備することにした。という  
のは、遠路来られる客人は先手をとっていただく  
のが礼儀であるというだけでなく、ある期間本務  
を離れて来られる人が選ばれるのはいろいろな都  
合や事情をふまえての上のことであり、それにあ  
わせて対応する講演者をさがすことはさほどむず  
かしいことではないからである。幸に若いリンデ  
ルさん以外は、国際学会ですでに何度か顔をあわ  
せ、エクスカージョンを共にした仲だったので、  
連絡は楽だった。会場はツェンペリーゆかりの地  
である京都ということとなったので、京大助教授  
の赤井竜男さんに会場の設営から宿舍の準備まで  
お願いしたところ、快諾されて完璧な準備をして  
くださった。植物分類学者のエクスカージョンは  
北村さんが用意して下さった。

ここで講演者を紹介させていただく。まずスウ  
エーデン側は、すべて王立林科大学 (*Skogshög-*  
*skolan*) 所属である。この大学はスウェーデン唯  
一の大学レベルの林学の教育機関で古い歴史をも  
った単科大学である。ちいさな大学が乱立してい  
る日本とちがって、規模も大きく、研究室の数も設  
備も人員もはるかにととのっている。タム (*Carl*  
*Olof Tamm*) さんは森林生態学の教授で、森林  
の土壌、施肥、物質循環などを中心として、広く  
森林の生態学的な基礎研究を行っている。スウ  
エーデンのIBP (国際生物学事業計画) の国内委  
員会の委員長をつとめ、現在はその延長であるS  
W E C O N (スウェーデン針葉樹林研究計画) を  
主宰しておられる。父君は有名な土壌学者である  
*Olof Tamm* 教授で、その研究業績が多く土  
壌学の教科書に引用されているので、父君と混同  
した人がその若いのに驚くことがめずらしくない。  
温厚な人をひきつける人柄のするどい切味をも  
った学者である。

リンデル (*Sune Linder*) さんはまだ33歳の新進  
気鋭という話がよくあてはまる人で、一昨年に生

態学的生理学の助教授になられたばかりである。前述のSWECONでマツのガス代謝の研究を中心に行っている。

日本側の講演者は、大阪市大の小川房人、東大の根岸賢一郎、林業試験場の塘隆夫の三博士である。小川さんは生物学の教授で植物園長であり、10年以上前に行われた大阪市大のタイの熱帯林の調査やIBPのマレイシア熱帯雨林の特別研究などで活躍された日本の熱帯林の一次生産研究の中心をなす人である。根岸さんは林学の助教授で、針葉樹の物質生産の基礎としての光合成や呼吸の研究である。塘さんは現在林試の土壤部長で、森林に肥料をやることの研究をつづけておられる。この講演者の紹介で、両国の講演者の組合せもおのずからわかっていただけとおもう。これら最適の日本側の講演者が準備期間がごく僅かしかなかったのにもかかわらず快諾して下さったのでシンポジウムの組織はきわめて順調にすすんだ。10時にオデヴァル大使の開会の辞のあと、講演者以外のスウェーデン側は北村さんの案内で雨の中を京都附近の植物をさぐるエクスカージョンに出発した。

シンポジウムは三つのテーマからなっており、全体の進行は私がやり、各テーマごとに両国から一名ずつの座長が出て司会した。シンポジウムの内容はきわめて専門的であるし、暮には出ることになっている記念行事のプロシーディングスに英語で全文、日本語で要旨が出るのでくわしくはそれにゆずることにする。

第一部のテーマは「森林の一次生産」で、座長はリンデルさんと京大名誉教授の四手井綱英さん、タムさんの「北方森林生態系の一次生産—長期および短期の問題」と小川さんの「熱帯の森林生態系の一次生産」である。スウェーデン側から提案された「北方の森林」に対して日本側が「熱帯の森林」をえらんだのは、日本に本格的な「北方林」がないこともあるが、国外調査はツェンベリーの精神にもあっているということからである。これらの講演によって北方と熱帯の森林生態系の対比がうきぼりされた。

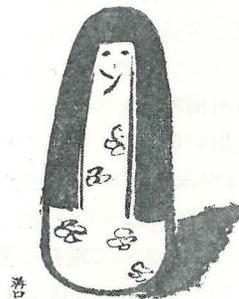
第二部のテーマは「林木の生長とガス代謝」で、座長はタムさんと大阪市大教授の吉良竜夫さん。講演はリンデルさんの「野外および実験室において肥料および水の供給を制限したばあいと制限しないばあいの生態学的生理学実験」と根岸さんの

「アカマツ、スギ、ヒノキの第2年目の実生苗の光合成と生長の季節変化」で、ともに林木の生長を基礎的な生活機能までほりさげたこまかな話で、第一部がトン単位の話であるのに対してミリグラム単位の話である。

中食後の第三部のテーマは「林業の仕事の環境に対する影響」で、座長はリンデルさんと私がつとめた。講演はタムさんの「森林施肥と伐採作業」と塘さんの「森林施肥」で、ともに自然の循環に対する人間の介入の影響をとりあげたものである。とくに興味深かったのは同じく森林に肥料をやっても、地形や気候のちがう両国では川の水に対する影響の出方がすこしちがっていたことで、自然が一筋縄ではとらえられないことを示していた。

定刻15時に林植物学会長の閉会の辞でシンポジウムは終わった。参会者30名位できわめてこじんまりした集りであったが、みな専門家であり、講演後30分間の総合討論や休み時間にはいろいろと深い討論や質疑が行われ、交流の実をあげることができた。

シンポジウムをすませて講演者、座長、準備委員に有志を加えて、分類グループと合流して北山をたずねた。世界にもまれなきめのこまかい林業である北山林業をつぶさに見ることははげしい雨のためにできなかつたが、雨にけぐる手入のゆきとどいた林の美をたのしんでいた。また磨丸太をつくる所も見ることができて、日本の伝統の美の感覚をふまえた森林のとりあつかいの一端にふれていただいたことは「森林生態シンポジウム」の幕をとじるのにふさわしいものであった。



# ツェンベリーをたずねて

## A. Trip to Sweden to Investigate Literature on Thunberg

北陸製薬株式会社 高 橋 文  
Fumi Takahashi

### 1 はじめに

学生としてスウェーデンに滞在していた頃街を歩きながら、ツェンベリーについて調べてみたいなど考えたことがあった。騒々しい東京の街と違って、静かで自然の多いストックホルムの街を歩いていると、何となくアカデミックなものに心が惹かれていくおもいがする。この時望んだことが、数年後に現実となってかなえられたことは幸運であった。というのは、今年は、ツェンベリーの江参府から数えて丁度200年にあたり、私は2月か戸ら5月にかけて約3ヶ月、日瑞基金派遣研究員として渡瑞し、主にツェンベリーについての資料等を調査研究することが出来たからである。以下、主な資料について記述する。

### 2 資料

A、文献（植物、動物、医薬関係の専門文献、及び日本で出版されたものを除く）

#### 1) 日本に関するツェンベリーの著書

○「Resa uti Europa, Africa, Asia, förrättad åren 1770—1779, I—IV. Uppsala 1788—1793」

ツェンベリーの9年間にわたるヨーロッパ、アフリカ、アジア紀行であり、4巻から成っている。

I巻、1770～1773年にわたる南ヨーロッパ及びアフリカの喜望峰紀行。ウプサラ、1788年刊

II巻、1773～1775年の南アフリカ奥地への2回の長期旅行記述とそれにつづくジャワ紀行。ウプサラ、1789年刊

III巻、1775～1776年の日本滞在記、ウプサラ、1791年刊

IV巻、日本の幕府、武器、宗教等についての記述、及び出島を立ち、ジャワ、セイロンを経て母国へ帰るまでの旅行記。ウプサラ、1793年刊。

この旅行記は、ドイツ語（Berlin, 1794）、英語（London 1795）、フランス語（Paris, 1796）に次々と翻訳、出版されている。なお日本に関する部分は、フランス語訳より翻訳されて「ツェンベルグ日本紀行、山田珠樹訳」として、1928年に駿

南社より、刊行されている。

○「Resa uti Europa, Africa, Asi aav Carl Peter Thunberg, Niloes klassikerbibliotek, Stockholm」

1951年、Erik Lindström の編集による上記旅行記の現代語版。

○「Tal, om Japanska Nationen, hållet för Kongl. Vetensk. Akademien, vid praesidii nedläggande, den 3 novemb. 1784, Stockholm 1784」

1784年、王立科学アカデミーで行われた日本国民についての講演記述。

○「Några varma bad uti Afrika, och Asien, Kungl. Vet. Acad. Nya Handl. vol 2, 1781」

王立科学アカデミー論文集に記載されている、アフリカ及び日本の温泉についての記述。

○「Inträdestal om de myntsorter om i äldre och senare tider blivit slagna och varit gångbara uti kejsardömet Japan, Kungl. Vet. Akad., Stockholm 1779」

1779年王立科学アカデミーで行われた日本の貨幣についての講演記述。

#### 2) ツェンベリーについての文献

○「Biographie öfver Carl Peter Thunberg; C. A. Agardh; Kungl. Vet. Akad. Handl. 1828」

1828年の王立科学アカデミー論文集に載っているツェンベリーの生涯及び業績についての記述。

○「Svenska Resandes Äfventyr i främmande länder ; Stockholm 1848」

スウェーデン人の冒険旅行という標題の本で、その1篇にツェンベリーの江戸参府についての記述がある。

○「Svensken i soluppgångens land; Mila Hallman; Stockholm 1904」

日出ずる国に出掛けたスウェーデン人、というタイトルで、ツェンベリーと日本とのことに関する著述。

○「Två svenska Japanfarare ; H. Hjärne ; Stockholm 1923」

日本を訪れた2人のスウェーデン人、というタイトルで、1775年来日のツェンペリーと、1651年来日の海軍軍人 Erikson Willman について書かれた215頁にわたる著書。

○「Svenskar i främmande land under gångna tider; C. V. Jacobowsky; Göteborg 1930」

外国に出掛けたスウェーデン人達というタイトルで、その中の1人としてツェンペリーについて記述してある小冊子。

○「Carl Peter Thunberg 1743—1828; N. Svedelius ; Svenska Linné-sällskapets årsskrift. 1944」

ツェンペリー生誕200年を記念して、スウェーデンのリンネ協会誌に書かれた、ツェンペリーについての論文。

○「Carl Peter Thunberg; A. Hj. Uggla; Natio Smolandica VIII (1945)」

1944年にツェンペリーの出生地である Småland 地方人会で行われた、ツェンペリーについての講演記述。

○「Swedish Men of Science 1650—1950. edited by Sten Lindroth ; Carl Peter Thunberg, Nils Svedelius ; Stockholm 1952」

スウェーデンの科学者について書かれた本のうちの1篇に、科学者ツェンペリーについての記述がある。英語版。

○「Thunbergs minne hyllat i Japan: Svenska Linné-sällskapets årsskrift. 1952」

前述のリンネ協会誌の小ノート欄に書かれた、日本で行われたツェンペリー生誕200年記念祭の記事。

○「C. P. Thunbergs ställning i japansk kultur-historia; S. Iwao; Svenska Linné-sällskapets årsskrift. 1953」

日本文化史上におけるツェンペリーと題した岩生氏の論文のスウェーデン語訳。この中に後述するツェンペリーあての日本人からの手紙の解説がある。

○「Svenska läkare och fältskärer i holländska ostindiska kompaniets tjänst; Ture J. Arne; Lychnos. 1956」

オランダ東インド会社に勤務したスウェーデン医師及び外科士について書かれており、そのうち

の1人、ツェンペリーについての記述がある。

○「Linnélärjungar i främmande länder; S. Selander ; Stockholm 1960」

外国に出掛けたリンネの弟子達の1人、ツェンペリーについての記述。

○「Fyra svenskar i Japan: Alf Persson; Orientaliska Studier 1974」

1651. Willman, 1775. Thunberg, 1868. Bäckström, 1879. Nordenskiöld の4人の来日したスウェーデン人についての記述。

○「Carl Peter Thunberg. Sydafrikanska och japanska botanikens fader; Tycho Norlindh; Läckö Slott mot fjärran land; Jönköping 1675」.

外国に遠征したスウェーデンの探検家について書かれた本で、その1篇に、南アフリカ及び日本の植物学の父といわれているツェンペリーについての記述がある。

### 3) ツェンペリー関係の手紙

○ツェンペリー宛の手紙

ウプサラ大学図書館のManuscript Department には、発信者別に分類整理された38巻から成るツェンペリー宛の手紙集がある。おそらく、全部で何千通におよぶものであろう。言葉はスウェーデン語が一番多いが、英語、ドイツ語、フランス語、オランダ語、ラテン語、その他等多岐にわたっている。

この中には、当時の日本のオランダ通詞からのオランダ語の手紙やメモが25通ある。

○ツェンペリーからの手紙

ツェンペリーが発信した手紙は、世界中に散らばっているものと思われる。スウェーデンにはそのごく一部が保存されており、ウプサラ大学図書館には、約40人あて、130通余の手紙がある。日本人にあてた手紙は、日本にあるものと思われる。

その他、ストックホルムの王立図書館、王立科学アカデミー図書館、カロリンスカ研究所図書館にもいくらかが、保存されている。

### B. その他の資料

#### 1) 植物標本

ウプサラ大学植物学教室には、ツェンペリーが日本、南アフリカ、ジャワ、セイロン等で蒐集した植物標本約27,500点が保存されており、この中に日本で蒐集した800種余が含まれている。例えば、「*Pollia japonica* Thunb. ヤブミヨウガ」

の標本は、青い実がそのままの色を保っていて、印象的であった。このように保存が良いのは、スウェーデンの湿気が少ない気候にもよるのであろう。なお、これらすべての標本は、マイクロフィルムにおさめられている。



ウプサラ大学植物学教室の地階にあるツェンベリーの像。その後、彼が蒐集した植物標本約27,500点がおさめられている。



ヤブミョウガ (*Pollia japonica* Thunb.) の標本。

## 2) ツェンベリーの墓

ウプサラ大学図書館に向って左脇に入る道路がツェンベリー通り (Thunbergs vägen) と呼ばれており、この道をはさんで左側に植物学教室、右側に公園と化学教室をへだてて墓地があり、この墓地の中にツェンベリーのお墓がある。ふと見過してしまいそうな、ひっそりとした普通のお墓である。墓の脇に小さく、「墓地管理人の管理による」と書かれた札が置いてあった。なお、この墓地には前述の「*Två svenska Japanfarare*」の著者、Harald Hjärneのお墓もある。

## 3) 日本の貨幣

ストックホルムの歴史博物館 (Historiska Museet) に世界中の貨幣が展示してあり、この中に日本の古い小判等の貨幣がある。ツェンベリーは日本の貨幣について記述しているが、これらの中にツェンベリーが日本から持ち帰ったものがあるのではないと思われる。

## 4) 当時の日本の品物

ツェンベリーが日本から持ち帰ったと思われる、

当時の日本で使われていた品物は、今回、東大総合研究資料館に展示されたものだけでも、浮世絵、鏡、揚子入れ、煙草入れ、きせる、おしろい入れ等がある。これらの他にも着物や傘、わらじ等多くが民族博物館 (Etnografiska Museet) におさめられていると思われるが2月末、私がここを訪れた時は、博物館は拡張工事のために取り壊されていて見学は不可能であった。

## 5) その他

ツェンベリーが採集した動物標本、持ち帰った長崎出島の地図、日本の書籍等、考えられる資料であったが、今回はたずねた所になく、確認し得なかった。

## 3 おわりに

自然科学に関する専門論文を除いて、スウェーデンで出版された、またはスウェーデンにあるツェンベリーについての、主な日本関係の資料を記述した。まだ数多くあると思われるが、それらは今後の宿題としたい。

滞在中、御指導や御協力を頂いたウプサラ大学の Hedberg 教授御夫妻、Sten Lindroth 教授、自然史博物館の Tycho Norlindh 教授、ウプサラ大学及び王立科学アカデミーの図書館の方々、及び友人 Ola Svensson, Alf Persson, Bengt Orre の各氏、そしてお世話になった大勢の方々、に厚く御礼を申し上げます。



ツェンベリー通り。この道をはさんで植物学教室と彼の墓が向いあっている。



ツェンベリーの墓

## 外務省の武田事務官の栄転を祝して



当研究所ならびに日瑞基金の監督官庁である外務省の担当官として、両法人の事業に多大の支援を払われた同省欧亜局西欧二課武田龍夫事務官には、駐デンマーク日本大使館の一等書記官に栄転され、去る8月に赴任された。

この栄転を祝うため、7月30日に当研究所主催でパーティーを開いたが、西村所長、高須常務理事等研究所役員のほか、松前会長の代理として東海大学の藤牧新平教授のご出席もあり、事務官を囲んで歓談が尽きなかった。

### 再版のお知らせ

#### 至誠堂新書58

# 福祉とは何をする事か

スウェーデンを場として福祉国家の現実を探り、その財政、経済システム、都市対象、教育問題、価値観の変化等、多面的アプローチ

刊の辞 西村 光夫  
序 高須 裕三・丸尾 直美

執筆者(執筆順)

高須裕三	丸尾直美	加藤良雄	永山泰彦	河野道夫	内藤英憲	菊池幸子	小野寺百合子	中嶋博	荒井 洵
------	------	------	------	------	------	------	--------	-----	------

第一章 スウェーデン福祉国家の社会経済史的背景  
第二章 選ばれた体制  
第三章 スウェーデン式ウエイオブライフ  
第四章 福祉社会の担い手たち  
第五章 福祉政策と年金  
第六章 教育による自由と平等の推進

スウェーデン社会研究所編

350頁定価980円

〒101 東京都千代田区鍛冶町1-3 電話(03)256-8121 振替東京97579 至誠堂